

しい。祭りのパレードに間に合うように、急ぎピストン輸送されているのだろう。

放水のちにゴゴゴと扇橋開門あがりカヤツクの出で来 荒井公子

二、三年前に公開されて、東京のミニ・バナマ運河として人気の江東区にある扇橋開門である。小名木川に設置されて人気の場所。ネットで見ると、この夏はカヤツクがたくさん集まったらしい。形容詞などなしにして、名詞と動詞だけでドキュメントの味わいをだしている。なお、「開門」は水位の異なる河川の間で船を上下させるための装置。

剪定を終へたるのちの松の負ふ朝焼けの色いまさかりなり 白岩裕子

理髪店や美容院に行ってきたばかりの人と同様に、剪定した後の庭木がかもしだす独特の空気。そこを「朝焼けの色」を出してうまく表現していて楽しい。「いまさかりなり」は、目立つほど赤色が濃くなっている意味だろうと読んだ。

六人の住み居る島に三十基ほどの墓あり朝日が照らす 菅野彰一

広島県の三原に近い小佐木島である。アートの島として、一時、ずいぶん知られたりもした。昭和三十年代までは百人以上の人たちが住んでいたらしいが、現在はわずか六人しか住んでいないらしい。高齢化率百パーセントとのこと。数詞を出して、イメージを具体的にしている点がポイント。

紀元前よりここに在る石畳 鵲が何か啄んでゐる

北久保まりこ

旅行詠で、この石畳はブルガリアの首都ソフィアの石畳である。旅行詠らしく、表現が具体的な点に注目する。とくに、日本では佐賀県などがざられた地域でしか見られないカササギが珍しい。

藤島雪子築地居留地四十六番館童貞女学校に帰国後通ひき 原口嘉代子

のちに佐佐木信綱の妻になる藤島雪子は、フランスのリヨン領事だった父親の帰国後、いっしょに帰国して童貞女学校（現・雙葉学園）に通った。現在の中央区にあったようだ。なお、現在の言語感覚からすると「童貞女学校」はなんとも可笑しい。

山路来て鳶の大きく舞うに遇う長く忘れておりし情景 片桐芙美子

「……鳶の大きく舞うに遇う」が、シンブルで、うまい。普通は「空」とか「雲」などを入れたくるところだが、そうした語はきれいに省かれている。言われてみれば、私たち現代の都市に住む者は、鳶を見る機会はない。

すきとほる羽根を展げる秋あかね朝のひかりを溜めつつ憩ふ 斎藤佐知子

晴れた朝の赤トンボをクローズアップで表現した一首。ふつうトンボは、背景とともに表現されるが、ここでは、トンボだけを表現した点が見どころ。